

飽かずして 別れし人の 住む里は  
左波子の見ゆる 山の彼方か

陸奥 飯坂にて、西行法師



みちのく  
陸奥の 旅にしあれば 椎の葉に

な  
くさまくら  
包みて思ふ 汝と草枕

令和七年十月六日

大中臣正比呂

謀反人として中大兄皇子のもとに、尋問を受けるために移送された有馬の皇子が、旅の途中で詠んだ歌が万葉集に残っている。

### 家にあれば 筈に盛る飯を 草枕

### 旅にしあれば 椎の葉に盛る

悲しい歌ではあるが、残してきた妻を思うことによって、自身の不安を抑えている心情が伝わってくる。

「家に居れば、ちゃんとした器で食事が取れたものを、謀反人の旅路では椎の葉に飯が包まれて出てくるよ。」

妻に宛てた歌ですが、当時は、妻もまた旅先の夫を思つて不安を抑えるためには、妻の習いがあつたと思ひます。

西行もまた、今の福島県飯坂の旅路から、向こうに望む左波子温泉を

じつ見つめ、そこで別れた女を思つてゐるのです。さて、その返歌は、

「みちのくの寂しい旅路なのでしよう？ 宿にも泊まらず食事は椎の葉にご飯を包んで食べているのかしら。あなたを思つて、その椎の葉のよう、あなたを包んで一緒に寝てあげるよ。」

と読んでみました。